

第66回日本公衆衛生学会自由集会 実施報告

開催期日	平成19年10月24日（水）18:00～20:00
会 場	愛媛県総合福祉会館研修室
参加者	16名（保健所管理栄養士、市町村管理栄養士、医師、歯科医師 等）
概 要	<p>◆開 会</p> <p>◆シンポジウム テーマ「健康危機管理時に関わる管理栄養士の活動について」 コーディネーター 佐藤加代子（国立保健医療科学院） 事例提供者 杉田弘子（新潟県） 関谷和美（新潟県） 濱口優子（石川県）</p> <p>～事例発表内容は省略～</p> <p>◆質疑応答 【杉田（新潟県）】 これまでの災害では、なぜ栄養士が求められていなかったのか。それは「災害だから我慢しなければならない」という考えがあったのではないかと。しかし、そのことで症状が悪化してしまうと、元の状態に戻すには、時間がかかり悪化も懸念される。また、首長が出す「勧告」と「指示」には強さの意味がある。「勧告」は危険を想定して避難するようにとの伝達、「指示」は命令である。 「命令」を出す以上はその後の対応が生ずることとなる。 それにより、栄養士も当然やらなければならないことがある。</p> <p>【濱口（石川県）】 輪島では、おにぎり2個とカップ味噌汁が毎日支給され続けていたが、これは、災害対策本部は「おにぎりが良い」という判断であったためである。「災害だからおにぎりが続いても仕方がない」という意識を取り崩すことが必要であった。 管理栄養士が「このままでは栄養状態に問題が生じる」と申し出た際、意外にも副食を付けてくれるような対応をしてくれた。質・量の調整をお願いしたところ、災害対策本部から「そのような指示をして欲しかった」と言われ、言ってみることも大切だということに気づいた。</p> <p>【参加者（保健所栄養士）】 今年1月の医療科学院で開催されたシンポジウムへ参加した後に災害が起きたので、栄養士が対応しているのか気になっていた。 その後、異動してしまったが、異動先で災害対策マニュアルの策定についての話があり、栄養士として意見を出している。どうしても、「栄養」は後回しになってしまう。 「状態が悪化すると、元に戻すのが大変である」ということを、平常時から言い</p>

続けなければならないということを感じた。

【参加者（歯科医師）】

医療科学院で「危機管理研修」を担当している。危機管理時に栄養士のことを取り入れたいと考えている。今後、歯科医師と栄養士がどのように関われば良くなるのか考えたい。

中越沖地震では、歯科医師も被災地へ入っているはずである。摂食嚥下で支援が必要な人が同じ被災地へ集まっていれば専門チーム（歯科関係）も出向けるが、一箇所へ集まっているような状況ではない。歯科はどのように出て行けば良いのか。

【関谷（新潟県）】

早いうちに歯科チームを派遣できるという申し出があった。福祉避難所を立ち上げ、そこへチームを派遣してもらった。口腔ケアは後々問題になるので、早めに入ってもらうことが必要である。

何が悪化するのか、ある程度予測して動く（派遣する）必要があると感じている。

【参加者（歯科医師）】

行政栄養士から歯科医師へつなぐのが良いか。

【杉田（新潟県）】

中越沖地震の時、10日以上経ってから栄養士として被災地へ入ったが、その時に「普通のものが食べられない」という声を聞いた。それは、避難しているような状況の中で、そのようなことを言っても良いのかという思いがあったようだ。避難している者に遠慮させるようなことがあれば問題が見つけられない。素直に「SOS」を出させることと一緒に専門チームを出すことが必要である。特に、高齢者は遠慮して言わないので、避難所に入っている保健師がどう引き出し、それをどうつなぐかが課題である。

歯科チームも入れるということを公にしなければならないだろう。

【参加者（歯科医師）】

歯科医療チームも出られるということの情報発信が必要である。

【佐藤（医療科学院）】

星先生には、歯科医師としての発言をいただいた。多職種が連携してみんなでやっていくことが必要である。

実際の現場では人手不足であるが、個人で被災地に入りたいと思っても簡単に入れない。また、業務として入るには上司の判断が必要である。そのようなことから、今回の集会には奥州保健所長が参加してくださっているので、上司の立場から発言をお願いしたい。

【参加者（保健所長）】

職員を派遣するという判断についてということより、別の視点で伺いたい。避難所へはどのような者へ介入するのか。

【杉田（新潟県）】

発生時（初動時）には、全員に食事が届いているかを確認する。その次に何が出

てくるのか、出てきた問題を一つずつ処理していった。健康な人へも心配りをして
いる、口に出していうかどうかは別にして。「食べ過ぎないように」などの張り紙
をするなどの対応や、FM放送を利用して広報するなどの対応もした。

【濱口（石川県）】

能登の時は、健康な人を後回しということではなかった。全体に提供する食事のこ
とを見ている。その中で、身体状況にあわせて個別に対応し、一つずつハードルを
越えながら対応した。

【佐藤（医療科学院）】

健康な人への対応をしつつ、食事の配慮が必要な者への対応もしなければならない
。そのためにはマンパワーが必要である。保健所長としても、ぜひ派遣の配慮を
お願いする。

【参加者】

新潟県では2度の地震（中越沖、新潟）に遭って100%良くなっているという
わけではないが、中越沖の時には、すぐに福祉避難所を設置した。また、中越沖の
時には、避難所へ何でも支援物資を受け入れるということではなかった。何でも受
け入れてしまうことで避難所が混乱してしまったので、中越沖では拒否することも
あった。

良いところ（前進したところ）もアピールして欲しい。

【佐藤（医療科学院）】

成果を形にしていけば良い。それも大事である。

【澤口（岩手県）】

石川県では、ガイドラインがあったから対応できたという良い点がある。新潟県
も、2回目の地震では栄養指導班がすぐに立ち上げられた。

【本田（熊本県）】

今日、メイン会場で行われたフォーラム1「公衆衛生専門職制度について」の中
で、足立己幸先生が「管理栄養士の立場から」と題して発言をされた。その中で、
公衆衛生イコール公衆栄養であるので、管理栄養士は公衆衛生の視点で活動しなけ
ればならないと、「健康危機管理時の栄養・食生活支援ガイドライン」を資料で示
し、危機管理の必要性を発言してくださり、心強く感じた。

前進するということで視点を変え、他職種との連携が必要であると思う。各都道
府県でも医療計画等を策定していると思うので、その中にどれだけ入れられるか。

避難所のQOLをどう上げるか、公衆栄養の視点をどう入れるか、管理栄養士も
入る必要があるという声が出るように。

【佐藤（医療科学院）】

地域保健活動の平常時は「生活習慣病予防」、有事は「危機管理」である。有事
の危機管理には、平常時が大切ということを感じてもらっただろう。

危機管理は、経験しなければわからないと思いかもかもしれないが、平常時からの生
活習慣病対策に取り組んでいけば、有事に何をすれば良いかがわかる。

国の指針に「医師・看護師等」は入っているが、栄養士が入っていない。

【梶（世田谷区）】

中越沖地震の際、管理栄養士の要請がない。国からメールでも良いから派遣要請があれば出やすい。

専門職が現地に行って問題点が見えてくる。

埼玉県内の保健所で危機管理に関する研修会があり参加したが、そこには、管内給食施設関係者の他、防災担当者まで出ていた。

平常時から体制整備ができていますが、これからも体制整備に向けて動こう。

【佐藤（医療科学院）】

今後も課題も持ちつつ活動を続けて欲しい。

自分のところで災害が起きても対応できる体制整備を進めて欲しい。

この自由集会をきっかけに、公衆栄養の方向性を考えていきたい。

歯科との連携も必要である。

【まとめ】

- ◆ これまでは、災害が発生した際、食に関しては「我慢しなければ」という意識が強かったのではないかと。しかし、高齢者や疾病を有する者は、食生活の乱れにより栄養管理が不十分であると健康状態悪化してしまう。管理栄養士は、それらを未然に防がなければならない。
- ◆ 被災地では口腔ケアの問題も生じることから、歯科医師との連携も必要である。
- ◆ 保健師が避難している者の「SOS」を引き出し、管理栄養士や歯科医師につなげる必要がある。
- ◆ 被災地では、必要な情報を必要な職種へつなぐなど「情報の共有」が重要である。
- ◆ 有事において的確に対応するためには、平常時からの体制整備が必要である。

◆ 閉会



（文責：焰硝岩）